

「見る」の文法化

——「てみると」「てみれば」「てみたら」を例として——

松 木 正 恵

【キーワード】意味的拡張、機能的拡張、結果的なアспект、因果関係の強調

1 はじめに

本稿では、視点を含む多様な認知的アプローチの前提として、最も基本的とも言える視覚に関する表現そのものに注目してみたい。具体的には、視覚の他動詞「見る」を中心とした形式「てみると」「てみれば」「てみたら」を取り上げ、意味的・機能的拡張と文法化の過程を記述的に跡付ける。このような言語の意味変化は、人間の一般的な認知能力の一面を明らかにする手掛かりとなるという意味で、認知文法の重要な課題の一つと考えられる。

2 意味的・機能的拡張と文法化

2-1 文法化とは

まず最初に、「文法化」の概念を確認しておこう。山梨(1995)によれば、「文法化のプロセスには、一般に動詞や名詞に代表されるような実質的な意味を持つ内容語(content word)から助詞、接頭辞、接尾辞のような機能語(function word)へ変化していく傾向、すなわち独立した単語として使われていた表現が次第に束縛された接辞的な表現に変化していく傾向がみられる。(p. 63)」わけだが、言語変化のプロセスは常にこの方向性だけとは限らない。同書ではさらに、「具体的な意味内容→アスペクト的(時制的)」「具体的な意味内容→言語主体の主観的な態度や判断を反映するモダリティ的な表現」「場所・空間の指示的意味→抽象的・関係的表現」「文レベルの接続・指示関係→テキスト・談話レベルの接続関係・結束性」「命題内容的→遂行的」という五つの文法化の傾向をまとめている。

これを参考に本稿で扱う「見る」の転用のプロセスを考えた場合、次の三つの可能性を考慮する必要があるのではないと思われる。

- (1)実質的な意味を持つ内容語としてその意味に拡張が起きている場合。
- (2)上記の文法化の傾向のうち、言語主体の主観的な態度や判断を反映するモダリティ的な表現への転化が主にかかわり、内容語から機能語に変化している場合。
- (3)機能語に変化したのち、その機能にさらに拡張が起きている場合。

2-2 「見る」の意味的・機能的拡張と文法化

次に、意味的・機能的拡張と文法化という現象を、具体的にはどのようにとらえていけばよいのか、本節では「見る」を例として概観しておきたい。ここでは、

以下の四種の辞書を参考にしながら、「見る」の意味的・機能的拡張と文法化の流れを辞書的な意味記述の方法にならって簡略に示してみることにする⁽¹⁾。

○林巨樹監修『現代国語例解辞典』小学館 1985年

○金田一春彦・池田弥三郎編『学研国語大辞典 第二版』1988年

○松村明編『大辞林』三省堂 1988年

○小泉・船城・本田・仁田・塚本編『日本語基本動詞用法辞典』大修館 1989年

【みる】〈他動詞〉

①視覚によって、物の形・色・様子などを知覚する。

「図形をみる」「泥棒が逃げていくのをみる」「島を右手にみる」

②風景などを、そこへ出かけていって楽しむ。見物する。「京都に行って葵祭をみる」

③芝居や映画、スポーツの試合などを鑑賞する。見物する。

「美術展をみる」「テレビをみる」「野球中継をみる」

④文字や記号を目で見て内容を理解する。

「新聞をみる」「掲示板をみる」「道順を地図でみる」

⑤物の、目に見える部分から、全体の様子や価値を推測して判断する。

「顔色をみる」「手相をみる」「空模様をみる」「答案をみる」

⑥目による知覚だけでなく、その他の知覚をも使って総合的に観察・推測・判断する。「患者をみる」「機械の調子をみる」「反応をみる」

⑦目以外の感覚によって物事の状態を観察・測定・把握する。

「子供の音感をみる」「腐った匂いがしないかみる」「煮物の味をみる」

「湯加減をみる」「肌ざわりをみる」

⑧事態・事情を把握・判断・評価・予測・推定する。

「相手の出方をみる」「世の中を甘くみる」「移動の時間を一時間みる」

「ますます円安が進むとみる」「彼を十年に一人の逸材とみる」

⑨仕事や何かの世話などを責任を持って引き受けたり、監督したりする。

「親の老後をみる」「子供の面倒を見る」「娘の勉強をみる」

⑩いろいろとやってみた結果、物事がある状態に達する、新たな局面を迎える。

「意見の一致をみる」「難事件が一つの解決をみる」「日の目をみる」

⑪好ましくないことを身に受ける、経験する。「泣きをみる」「馬鹿をみる」

⑫(「～てみる」の形で)ある動作を試みにする。試しに～する。「手紙を出してみる」

⑬(「～てみれば」「～てみると」「～てみたら」などの形で)次にくる事柄が実現したり明らかになったりするための条件を表す。

a. ある結果や結論が出てくるもとになる動作を述べる。

「来てみると誰もいなかった」「そう言われてみれば、本当にそのとおりだ」

b. ある動作が実現することを仮定する。もし～したら。

「一度痛い目にあってみたらわかるだろう」「こんなことが相手側に知れてみれば(てみろ)、大変なことになるぞ」⁽²⁾

c. ある動作が実現したことを理由として述べる。～である以上は。～したから。「親としてみれば当然の気持ちだ」「それが今風の考え方であってみれば致し方ない」

①～⑤は目的語が視覚的な対象であり、なかでも特に①～③が視覚動詞「みる」本来の基本的な用法といえる。④はそのものの存在を単に視覚的に認知したに止まらず、その内容理解までも含んだ用法である。⑤は、実際に視覚的に認知できる対象は問題とすべき事象の一部に過ぎず、その一部から全体を推測するという意味で④よりも拡張している。「答案をみる」は、④のレベルで考えて内容理解と見なすこともできるが、内容理解のうえで評価を下し個人の能力を推測するところまで考えれば⑤のレベルと見なした方がよいと思われる。⑥は視覚が中心だが、それ以外の知覚も用いて総合的に判断するもの、⑦は視覚以外の聴覚・嗅覚・味覚・触覚の対象が目的語にきて、「みる」が知覚全般に拡張された用法である。

⑧以下はさらに拡張された認知的用法で、「みる」の意味が、⑧「判断・評価・予測・推定する」、⑨「世話をする」、⑩「(ある結果に)達する」、⑪「経験する」のように変化している。⑩⑪は主体の意志的行為でさえない。特に⑪の例文などは固定連語と言ってもよいだろう。意志動詞「みる」が、主格ではなく経験者格を要求するような性質の動詞にまで変容しているわけである。ここまでは、先に2-1で挙げた「みる」の転用のプロセスのうちの、「(1)意味的拡張」に当たる。

⑫以下は、「(2)内容語から機能語に変化している場合(文法化)」である。⑫の「みる」には本動詞としての意味は既になく、「試す・試みる」の意味の補助動詞と化している。⑬も補助動詞の用法だが、⑫に比べてさらに文法化している。⑫は「やる」のような意志動詞に後接して「みる＝試す」の意味を添加しているが、⑬の場合は意志動詞さえ現れず、「みる」が何の意味を添加しているのかわかりにくい。「てみると・てみれば・てみたら」の各形式がそれぞれひとまとまりの形で単に条件を示していると考えられない。それも、a「言われる」、b「痛い目にあう」「知れる」、となるに従って前接する動詞の動作性も希薄化し、c「親とする」「考え方である」に至っては、もはや動詞とは呼べない状態述語になっている。cのレベルの表現は、「みる」の補助動詞用法とさえ言えない⁽³⁾。このように、文法化のレベルにもさまざまな段階が考えられることは、前掲の「(3)機能的拡張」に相当する。

ちなみに、「見る」に見られたような方向への拡張が他の感覚動詞にも同様に行き渡っているわけではない。まず大きな違いは、文法化が起きていない点である。つまり、「～てきく・～てかぐ・～てあじわう・～てふれる」のような補助動詞的・複合辞的表現は存在しない。また、意味の拡張においても、そのもとになる情報は本来の五感によってとらえた情報が多い。例えば、「願いをきく」は下線部の聴覚情報に基づき、「どうもあの政治家がにおう」「温泉気分をあじわう」は、醸し出す雰囲気を感じ(嗅覚)や味(味覚)にたとえることで成り立つ。「乙女の純粹な気持ちにふれる」も、実際には触れられない抽象的な「気持ち」に触れるという疑

似的な触覚情報による。従って、「?煮物の味をきく」「?肌ざわりをきく」のように聴覚情報によらないものを聴覚的に叙述することはできず、たとえや疑似情報を用いずに嗅覚・味覚・触覚的な叙述をすることもできないのである。その点視覚は汎用性が高く、視覚情報によらなくても「煮物の味をみる」「肌ざわりをみる」「犯人の告白は嘘のようにみえる」のように視覚的に叙述することができる。

さらに、拡張用法といっても視覚以外の場合には、たとえや疑似情報に基づく(言い換えれば知覚に基づく)主観的認識が中心であり、知覚を超えて抽象化し、純粋に判断や思考を表すようになったと見なせる表現はないと言ってよい⁽⁴⁾。

3 「て見ると」「て見れば」「て見たら」の意味・機能的拡張と文法化

これらの形式は、いわゆる“テ-form”に接続する「見る」の条件形であるから、どのような種類の動詞が前接するかを観察するのがポイントである。以下では、動詞の種類によっていくつかのグループに分けて考察していくことにする。

3-1 意志動詞(動作性)

1. すると、「もうそれ以上さわるな」といきなり大声でどなりつけられた。顔を上げてみると大男の渡辺戦務参謀が血相を変えて立っていた。(山)

2. それに実際に行ってみたらポスターで見た景色の方が良かったなんてことにならないとも限らないのだ。(世)

有情主体の動作性の意志動詞に接続し、「～して、そして見ると(見たら)」と時系列(順次的動作)で解釈可能な、本動詞「見る」の最も基本的な用法である。

2-2で示した「みる」の意味記述を参考に見ると、1が①に2が②に相当する。

3. 逃亡の意志などは今更、毛頭なかったが、ただ気をまぎらわすために戸を両手で押してみると、門は外側からしっかりとしめられて、びくとも動かない。(沈)

4. その荷物は、～白い布包みだが、どうも荷物らしくは思われない。そっと手で触ってみると、人間の耳を撫でる手応えを受けた。(黒)

5. ～、一人の兵隊が、「小隊長、ガソリンの匂いのするごとあります」と言い出した。鼻をくくんやってみると、確かにかすかなガソリンの匂いがしている。(山)

6. 部屋は奇妙にしんとしていた。まるで音抜きをされたような具合だったが、咳払いをしてみるとちゃんと咳払いの音がした。(世)

これらは、1・2より多少意味が拡張している。3も「戸を両手で押して、そしてみる」とパラフレーズできるが、「みる」内容が、視覚のみでなく他の知覚をも動員した総合的な判断になっている点で、前述の意味記述の⑥に当たると思われる。また、4は触覚、5は嗅覚、6は聴覚による判断であることから、意味記述の⑦に相当する。この用法の場合、例えば6で「咳払いをして、そしてみる」とちゃんと咳払いの音がした」と順次的動作にすると、幾分違和感が残るようである。それは、⑦の「みる」がどんな場合でも視覚以外の五感を表せるとは限らないからである。つまり、「音感をみる」「匂いをみる」「肌ざわりをみる」のよ

うに五感とかかわる名詞をヲ格にとる表現では、先に五感の種類が特定されるため、「みる」の意味もそれに伴って限定して解釈されるが、「みると～」の形で後に五感の種類が提示される場合には、「みる」本来の視覚的解釈がまず念頭に浮かぶため、その後に続く視覚以外の描写と一瞬矛盾を感じてしまうのである。

7. お腹は空いていたはずだが、いざ食べてみると食欲がなかった。(花)

8. ～、長城の予定線の～に労働部隊が配分されて、いざ仕事にとりかかってみれば、何ヵ月もたたないうちにたちまちこの説の迷妄がさらけだされた。(亡)

9. まして、蓮太郎は——書いたものの上に表れたより、話してみると又別のおもしろみの有る人で、～、優しい、言わば極く平民的な気象を持っている。(破)

7～9になると、前述のようなパラフレーズが難しい。「～して、そして(様子・事態・事情を)みる(＝把握・判断する)と」(意味記述の⑧)のように無理に考えられないこともないが、それよりもむしろ、「いざ～してみると(みれば)」の形で生じてくる新たな意味に着目すべきであろう。ここでは、“これまででしたことがなかったこと、しようと思いながらためらっていたこと等に(やっと)取りかかり、その結果明らかになった新事実を述べると”の意味⁽⁶⁾になっている。

9には「いざ」はないが、ニュアンス的には同じである。

10. 「胸を射たれて、～、虫の息の若い兵隊を見つけた。～、だんだん聞いてみると、そいつは分隊長から一緒に投降しようと誘われたんだね。ところがきかなかったもんで、分隊長がそいつを射って、一人で行っちゃったらしい。」(火)も、7～9と同様のパラフレーズができないこともないが、「だんだん(次第に)～してみると」の形で「継続的に徐々に～していくうちに明らかになってきた新事実を述べると」の意味⁽⁶⁾を表すと考えた方がよい。実はこれらの意味は、2-2の意味記述⑨aに示した、「ある結果や結論が出てくるもとなる動作を述べる」の下位分類に当たる。つまり、既に文法化して内容語から機能語に変化していることになる。しかしこの意味は、同上の⑩で既に示した「物事が新たな局面を迎える」に通じるものであり、さらに元を正せば⑧の「事態・事情を把握・判断する」から発しているものと思われる。

11. ～日本側の記録を見てみると、海中に落ちたのは字垣参謀長の飛行機で、自分が山本機を撃墜したのでないことはあきらかになったが、～。(山)

この例になると、もうパラフレーズは無意味である。この「みる」が視覚的な意味を喪失していることは、文字通り視覚的な行為を表す「見る」(この場合は意味記述の④)と共起できることで既に明らかだが、その拡張用法である「判断・推定する」(⑧)や「ある状態に達する」(⑩)の意味でさえない。この場合も「みる」は文法化を経て内容語から機能語に変化し、「何かを試みる・試しに～する」(⑫)の意味になっていると考えられる。

12. ハンバーガーとごく日本式の発音をしたら通じなかったので、ハにアクセントを置いて思い切りキザに発音してみたら、たちどころに通じた。(若)

の例などは、「ごく日本式の発音をしたら通じなかった」ことを踏まえて、今度は試しに「思い切りキザに発音してみた」のであるから、典型的な⑫の用法である。

13. 吉本という教師についての山脇幸子の断片的想起を、順序正しく並べ替え、回想という形にしてみるとこういうことになる。(恋)

も、元々形のないものに試みに形を与えるわけであるから、⑫の用法と言える。

ところで、「何かを試みる・試しに～する」(⑫)の用法かどうかというのは、実際は文脈によって大きく左右されるようである。本節で紹介した例文1～6は「みる」の意味的拡張(内容語)として跡づけてきたわけだが、見方によっては多くの例が⑫の用法、つまり文法化して機能語に変化したものとも考えられる。例えば3は「ただ気をまぎらわすために」という表現が「試しに戸を両手で押す」を導きやすく、6も「まるで音抜きをされたような具合」という場面だからこそ試しに咳払いをして音がするかどうか確かめているのだと解釈できる。一方、機能語としてのもう一つの方角である「ある結果や結論が出てくるものとなる動作を述べる」(⑬a)の用法についても、同様のことが言える。例7・8の「いざ」だけでなく例2の「実際に」もいわゆる<結果的なアスペクト>を導きやすいし、⑫の典型例として挙げた例12・13でさえも、⑬aのように解釈することが不可能ではない。

考えてみれば、⑫と⑬aとは同じ現象についての見方の違いであるから、例12・13のように両者が共存していても不思議はないとも言える。つまり、例12の場合なら、「思い切りキザに発音し」ようとする動機に焦点を当てれば⑫の解釈が出やすいし、「思い切りキザに発音し」たので「たちどころに通じた」という結果に焦点を当てれば⑬aの解釈が出やすいということなのである。従って、動作性の意志動詞の“テ-*form*”を受ける「見る」に関して言えば、意味的拡張である内容語のレベルと、文法化を経た機能語のレベル、さらに機能語の機能的拡張のレベルとを同一線の延長上にとらえることはできないようである。意味的拡張でさえ必ずしも一方向に収斂していくわけではないが、その各段階で、ちょうど縦軸に対する横軸のように、文脈による二通りの機能語的解釈が可能にもなり、さらに、この二通りの機能語的解釈がこれまた一方向の機能的拡張によるものではなく、同一現象の見方の表裏に過ぎない、ということになる。

3-2 意志動詞(思考動詞)

14. その人達は他人眼にはどうしても不幸な人達と云わなければならない。然し君自身の不幸に比べてみると、遙かに幸福だと君は思い入るのだ。(生)
15. 光悦の書、宗達の絵と比べると歌は大変劣っていると誰でも考えるが、こういう考え方が、まことに現代流の考え方、少くとも光悦という人を無視した考え方ではあるまいかと反省ししてみると、これは難かしい問題になる。(悦)
16. 出世栄達の望みをすてて、生涯を高校の先生で暮す気になってみると、却ってさばさばとして、久しぶりに自分の心を取戻したような気分です。(蹠)
- 思考動詞に接続する場合は、時系列(順次的動作)で解釈可能な「見る」の基

本的用法は少ない。3-1で取り上げた動作性の意志動詞と違って、思考することと見ることが継起するという状況は考えにくく、また、「みる」の拡張用法として思考動詞の意味(⑥⑧)も生じやすいため重複した印象を与えるからであろう。14・15は時系列でとらえられないこともないが、「比べて／反省して、そして見る」というよりは前述の⑬aの解釈の方が妥当である。16は⑬aの中の<結果的なアスペクト>を表すもので、15に比べて、一層結果の状態に重点が置かれている。

17. 思想が何であるかは、これを生活に対して考えてみると明瞭になるであろう。
(論)

18. 私はそれまでかたつむりというのは梅雨どきにしかいないものだと思いますこんでいたのだ。しかしよく考えてみれば、もし梅雨どきにしかかたつむりが現われないとすればそれ以外の季節にかたつむりがどこで何をしているというのだ？(世)

19. 考えてみるとなるほど不思議だったが、そのまま引き下がるのが癪だったので、知りもしない仏教の影響などを持ち出してみたが、～。(若)

20. 「～。要するに法律なんて、案外いい加減なもんですね。その時々々の社会事情により、経済事情によって、法律はどんどん変るんですからね。永久不変の法律なんていうものは無いんですよ。考えてみればばかばかしいですな」(蹉)

17～20はすべて「考える」の“テ-form”に後接したものである。「みる」が既に機能語である点は14～16と同様だが、同じ動詞に後接していても、文脈によって機能語としての働きが異なるようである。17は⑫と⑬b(仮定)の両方の解釈が可能な例であり、18は⑫より⑬aの方が優勢である。19・20も⑬aの範疇だが、より機能的拡張が進んでいると見る。18の場合は、「考え」た結果として後件の疑問が生じたという一連の思考活動だが、19・20の場合は「考え」た結果ある感情に陥ったという心理的变化である。後者は原因-結果の形式をとっているが、実際は後件の感情の方に重点がある。特に思考活動をしていなくても、後件の感情を強調したいときにこのような言い方ができるのである。その意味で前件の動詞「考え(る)」は形骸化しており、従ってそれに後接する「みる」もより機能的拡張が進んでいると考えられる。

3-3 無意志動詞(有情主体の変化を表す動詞)

21. 僧院に着いてみると、いつもは静かなその場所が、あふれそうな熱気で騒然としている。(陥)

22. 明日の朝目が覚めてみれば、昔と同じ健康な身体に復っていて、クレゾールのおいも、ごつごつした病衣も、不愉快な咳も、気持の悪い微熱も、みんな掻き消すように消えてしまい、自由に、嘈々と、都会の雑沓に身を置くことが出来ると、——そういう無益な空想をしない病人が一人でもいるだろうか。(草)

この場合も、時系列で解釈可能な基本的用法は少ない。21は物理的な変化を表す動詞を受け、その結果、主体が偶然見た内容を後件で述べる基本形である。22

は生理的変化だが、主体の見た空想が後件に置かれており、21と同じ構造である。

23. すっかり自分自身夢中になってしまい、気づいてみると、折角の恋愛の権威者としての演出もなにも忘れてしまっていて、もう別れねばならぬ時がきていた。(櫛)

24. さんは改めて過ぎた月日を思い出した。この三年間、結婚と離婚という大きな波が自分をとりまいていった。言葉で言うともあまりに大きい。だが実際、それにぶつかってみると、さほどに大きなことには思えない。意外に呆気ない。(花)

23は知覚、24は比喩的・精神的な動詞である。後件の事柄は実際に見えるわけではないが、「もう～時がきていた」「さほどに大きなことには～」と見えるかのよう描く。「みる」が機能語化し＜結果的なアスペクト＞を表すとも考えられる。

25. 「それにしても、よ。こんな事件にかかわり合ってみると、男たるもの剣術の一手二手はやっておくべきだと、つくづくおもうな。」(剣)

26. はじめのうち、ぼくは太郎にこの疲労感をおぼえていた。彼の家庭の状況を知てみると、いよいよ手のつけられないような気がした。(裸)

27. 心が決てみれば志方の自分への気のつかいようがむしろ腹立たしく口惜しかった。(花)

25～27になると、後件は主体の感情そのものを描いており、本来の「見る」意識は薄れ、内容語から機能語に変化している。機能語の中でも、無意志動詞に「試しに～する」(㊹)が続くことはできないため、この場合は「ある結果や結論が出てくるものになる動作を述べる」(㊹a)の用法に入ると思われる。前件では主体の意志と無関係にある状況に至ったことに触れ、後件ではその結果生じた主体の感情を述べる、という構造は＜結果的なアスペクト＞の一種と考えてよい。“その状況が成立したときに～になる／～がわかる”の意味である。

28. もっとも倉庫係も慣れてみればそれなりに余得があった。閑なときは徹底的に閑で、午前中だけで仕事が無くなってしまうことも多かった。(櫛)

29. だが、それから一週間すぎたが、待っていた合格通知はついに彼の手元にもたらされはしなかった。そうわかってみれば、周二は人並の失望と落胆からあんがい即座に――平時の学生には考えられぬほど素早く立直った。(櫛)

28・29は、これまでの例とは異なり、事態を外側から客観的に描いたものである。21～27は、前件の経験主体の目を通した光景やその主体の心中そのものを後件で描いており、経験主体と話し手とが一体化して描写の内部に入り込んでいたが、28・29は話し手と経験主体が切り離され、話し手の立場から状況を眺める形になる。それに伴って「みる」にも機能的拡張が起き、㊹aの＜結果的なアスペクト＞だけでなく、㊹cの＜因果関係の強調＞の働きも生じていると思われる。㊹cは“前件の状況から見て後件が生じるのは当然”という意識で因果関係をとらえるもので、「～である以上は・からには」の意味になる。

3-4 無意志動詞(受動態)

30. 寝込みがちな奥の間にいつもいた父の姿はもう無かった。～、いざ死なれてみると家の中に大きな欠落が生じたようであった。(花)

31. 指摘されてみると、説の内容も正論だ。(人)

3-3と同様、時系列で解釈可能な基本的用法は少ない。直接受身・間接受身の違いはあっても、30・31は後件を可視的なものとして描いているようである。

32. ～、その熊さんのいいところが、だんだん嫌になって行く。そういう内儀さんの気持も言われてみればなるほど判らぬこともなかった。熊さんの持っているよさには、確かにそんなところがあった。(物)

33. ～、おれが世の中に出たら、おれの絵が世間に出たらと、そればかり思っていたのだ。ところが、世の中に迎えられてみると、まるっきし、だめなのだ。(路)

34. ～、もっぱら空想に鞭打ち、自分をはげましてきたものだが、いざ実行の機会を与えてみると、そう子供っぽいことばかりも言っていられない。(砂)

35. それまでの信長にとっては、——日本を制覇する——ということは途方もなく大きな望みのように思われたが、この町の華麗な潮風に吹かれてみると、日本制覇などはひどく小さな野望にすぎぬようにおもわれはじめた。(盗)

32～35は後件に判断・評価・当為等が置かれている。主体の内面を描くことができるという意味で、機能語に変化したものである。＜結果的なアスペクト＞を表すが、33・34は直接受身のため“実現しにくい何かが実現した結果明らかになった新事実を述べると”の意識が、35は間接受身のため“その状況が成立したときに(たまたま)～”の意識が強い。後者は3-3で挙げた25～27に近い用法である。

36. 一枚の布切のため、右からも左からも無法に痛めつけられ、一生をめっちゃうにされてみれば、人を憎み世間を憎むのは当然なことだ。(さ)

の場合はさらに機能的拡張が起き、⑬cの＜因果関係の強調＞の働きも生じている。前節の例とは違い、経験主体と話し手が一体化しているともとれる。「一生をめっちゃうにされる」という受身表現の特殊性に起因した拡張かもしれない。

3-5 無意志動詞(非情主体の変化・作用を表す動詞)

ここで扱うものは自然現象・事象の継起等、客観的な事柄の描写である。

「(何か₁)が～し(され)て、そして見ると、(何か₂)が～」とパターン化すると、3-1～4の有情主体の場合は、(何か₁)と「見る」主体は同一人物で、(何か₁)と(何か₂)の関係は、(何か₁)=(何か₂)の時と(何か₁)≠(何か₂)の時とがある。ところが本節の非情主体の場合は、主体が「見る」ことはできないから、(何か₁)≠「見る」主体であり、(何か₁)と(何か₂)の関係は有情主体と同様である。それでは「見る」主体は誰なのだろう。当然、その文の話し手である。従って、本節の「てみると」類は、全体としてモダリティ形式に移行しつつある表現とみなすことができよう。

37. 煮上ってみると、七ミリのタンの切れは、薄っぺらくなり、～。(太)

38. 「～、雪がとけてみたら木がまる裸になってたんでびっくりしたなんてトッポイことをヌケヌケ書いている。～」(パ)

39. ところが、いざ幕が上がり詳細が判明してみると、だれひとり想像すらしていなかった、えたいのしれないものが舞台上におさまっていた。(人)

37・38は後件が可視的、39は可視的なものとして比喩的に描かれる。話し手が「見た」とも考えられるが、<結果的なアспект>に傾いていると思われる。

40. 昨夜の興奮と苛立ちも、夜が明けてみると、まるで嘘のようだった。(砂)

41. 六〇年代の後半にアメリカは人類の“夢”をほぼ達成したとさえ言える。しかし、実現してみると、それはなぜか空虚で味気ないものであった。(若)

「見る」意識は薄れ機能語に変化している。前件である状況に至り、後件でその結果生じた話し手の感情・評価を述べる<結果的なアспект>の一種である。

42. 町内の一部に病院設立に対する反対運動が起ったのも無理はなかった。しかし、いざ検病院が完成してみれば、附近一帯の商家はすべてその恩恵を受けて成長したといっても過言ではなかった。(楡)

42は、<結果的なアспект>より機能的拡張が一步進み、“前件が起きたからこそ後件が成立したのだ”という<因果関係の強調>になりつつあると言える。

3-6 慣用的表現

本節で掲げる「てみると」類は、前件の主体を想定できないこと、及び固定表現として扱われることが多いこと等から、慣用的表現とみなすことにした。

43. もう大昔のことだ、四年もたてみると、こうしたできごとの断片はぼくの記憶のプールのなかを少女の白い足のうらのようにひらひらと泳ぎまわっており、それはいまでも驚くほど鮮かだが、。(聖)

43は非情主体だが、44以下の主体を想定できない表現へと連続していく境界的な用法と言える。慣用的表現は非情主体の延長上にあると考えられるからである。

44. ～、徹吉はミュンヘンに来て早々、～衝撃を受けたことがあった。他人には理解できぬ、徹吉自身にしてもあとになてみれば、友人に洩らすのさえ気恥ずかしい些細な事件にすぎなかったが。(楡)

45. それは長年の間、吟子が待ち望んだ情景であったが、いざとなてみると、何やら寒々として虚ろな淋しさでしかなかった。(花)

46. 「～。なにあに、このあいだの一件さえなければ、なんでもなく、すうっと仕事も出せますが、なんたって、ああいうことがあてみると、そのままってわけにもいきませんや。～」(路)

44・45は変化動詞「なる」に後続しているが、46のような状態動詞「ある」に後続する例さえあるということは、「てみると」類の文法化の重要な証左となる。

47. 「不運だったのですよ」友子が母を慰めるように言ったが、当のぎんにとってみれば不運だけで済ませられるものではなかった。(花)

48. しかし、この程度の航行技術は、その面では他の追隨を許さないジェノヴァやヴェネツィアの船乗りにしてみれば、それほどむずかしい技ではない。(陥)

47・48は下線部全体で、立場・視覚・主題化等を示す助詞的に機能している。

49. 「～。なぜそんなことをなさったの?」「なぜなんてきくひとがあるもんか。まあ、いってみれば治療のためです。おまじないだ」(聖)
50. 「其処に行くと死んでしまった人間というものは大したものだ。何故、あははっきりとしっかりとして来るんだろう。まさに人間の形をしているよ。してみると、生きている人間とは、人間になりつつある一種の動物かな」(無)
- 49は下線部全体として副詞に、50は接続詞にそれぞれ相当する表現である。
51. この発見が確実に証したところは、～、従来実朝の歌と認められて来たものの大部分(六百六十三首)は、すべて彼の二十二歳以前の作であるという事、～、その後の彼の作歌の殆どすべては散佚したと考えるべきだし、従って、将来新たな彼の歌集の発見も考えられぬわけではないという事、そういう次第であってみれば、折角の大発見も、実朝の創作の発展とか筋道とかに関する本質的問題を少しも明らかにする処はなく、寧ろ為に問題はいいよいよ謎を深めたとも言えるのである。(実)
52. 抵抗物のないところに創造という行為はない。これが、芸術に於ける形式の必然性の意味でもある。あり余る才能も頼むに足らぬ、隅々まで意識され、何んの秘密も困難もなくなってしまった世界であってみれば、——天才には天才さえ容易とみえる時期が到来するかも知れぬ。(モ)
- 51・52は助動詞的な「である」に後続した珍しい例である。ここまでくると、もはや「見る」の実質の意味はない。「であってみれば」の形式で因果関係を表現するものとみなすべきだろう。「てみると・てみたら」にこの用法は見られない。

4 おわりに

最後に本稿での考察をもとに、「てみると」類の意味的・機能的拡張と文法化のプロセスを簡単にまとめておきたい。

I 「てみると」類の「みる」の意味的拡張……視覚→五感→把握→判断→新局面
↓ = 文法化

II 「てみると」類の形式全体としての機能的拡張

i <試行> “試しに～する”——意志動詞(有情)

ii <結果的なアспект> ——意志動詞(有情)/無意志動詞(有情・非情)

↓
“初めてのことに取っかかりその結果わかった新事実を述べると”
“徐々に～していくうちに明らかになってきた新事実を述べると”
“実現しにくい何かの実現した結果明らかになった新事実を述べると”
“意志と無関係にある状況に至りその結果生じた感情を述べると”
↓
“その状況が成立したときに(たまたま)～になる/～がわかる”

iii <因果関係の強調> ——無意志動詞(有情・非情)

“前件の状況から見て後件が生じるのは当然である”

意味的拡張がどのような過程をたどり、そして文法化し、さらには機能的にも

さらなる拡張を続けていくのか、その連続性を跡づけることは人間の認知能力を探るうえでの重要な基礎資料となる。今後は他の視覚動詞や思考動詞にまで範囲を広げながら、何をどう認識しどう表現するのか、その仕組みを探ってきたい。

《注》

- (1)語の意味的・機能的拡張の過程を正確に跡づけるためには、通時的な意味変化を追う必要がある。しかし、本稿ではあくまでも共時的な視点に立ち、拡張の過程を認知的に記述することを目指して、現代語の意味記述のみに限定した。
- (2)今回の用例調査では⑬bの仮定表現に当たる「てみれば」類は見つけられなかった。「てみろ」の形なら数例収集している。「そんなことをこれっぽっちでも云ってみろ、のぶ公はかんかんになって怒るぞ」(さ)
- (3)⑫⑬の大きな違いは、⑫が「てみる」で言い切る述語用法があるのに対し、⑬は「てみれば・てみると・てみたら」の固定した形式で接続用法としてのみ用いられ、述語用法はないことである。このような点から筆者は、⑬の「てみれば」類を⑫の補助動詞「てみる」とは区別して複合辞と認める立場をとる。
- (4)視覚動詞と他の感覚動詞の意味的拡張における違い、及び「とみると」類「とみえて」類については松木(1997)で詳細に分析した。なお本稿と松木(1997)は元々一つの論文であった関係で、二章に一部重複があることをお断りしておく。
- (5)山梨(1995)では<結果的なアスペクト>を意味する表現とされ、次の例が挙げられている。「確かに、じっくり話し合ってみたら、彼の気持ちがよく分かった。」「実際に、実行してみれば、そんなに難しくはなかった。」(p. 91)
- (6)10の「聞く」は意志動詞だが、相手の話を受け身的に聞く状況が想定されるここでは、無意志動詞に近づく。従ってこの場合の「てみると」は、3-3の“その状況が成立したときに～になる／～がわかる”の意味に近いと考えられる。

《参考文献》

松木正恵(1997)『「見えること」と引用表現』

(早稲田大学特定課題論文集『状況と認知』)

山梨正明(1995)『認知文法論』 ひつじ書房

《例文出典》

阿川弘之「山本五十六」、安倍公房「砂の女」、有島武郎「生れ出づる悩み」、池波正太郎「剣客商売」、石川達三「青春の蹉跎」、井伏鱒二「黒い雨」、井上靖「あすなろ物語」、遠藤周作「沈黙」、大岡昇平「野火」、開高健「流亡記」「裸の王様」「パニック」、北杜夫「楢家の娘」と、倉橋由美子「聖少女」、小林秀雄「モオツァルト」「無常という事」「実朝」「光悦と宗達」、塩野七生「コンスタンティノーブルの陥落」、司馬遼太郎「国盗り物語」、島崎藤村「破戒」、曾野綾子「太郎物語大学編」、筒井康隆「エディプスの恋人」、福永武彦「草の花」、藤原正彦「若き数学者のアメリカ」、星新一「人民は弱し官吏は強し」、三木清「人生論ノート」、村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」、山本周五郎「さぶ」、山本有三「路傍の石」、渡辺淳一「花埋み」